

「中国文史資料集粹」データベースを利用して

大澤 肇

二〇一七年、中国における電子書籍の老舗である北京超星公司から「中国文史資料集粹」データベースがリリースされた。筆者は東方書店より本データベースのレビューを依頼されたため、トライアル版の使用を申し込み、一ヶ月ほど試用してみた。本稿はその成果である。

一 「文史資料」とは何か

「文史資料」とは中国近現代史の研究者であれば、誰でも知っている著名な歴史資料である。

一九五九年に周恩来の指示で、中国人民政治協商會議に歴史資料を収集する組織として、文史資料研究委員会が置かれ、その後に省・県レベルの政治協商會議にも文史資料研究委員会（一九八六年に文史資料委員会に改称）が置かれることとなっ

た。この文史資料委員会が文化大革命の時期を除き、近現代史に関わる史料収集・記録活動を着実にやってきた成果が文史資料である。

彼らが重視してきた方針として「三親」、すなわち「親身經歷」（自ら経験したこと）、「親眼所見」（自ら見たこと）、「親耳所聞」（自ら聞いたこと）が挙げられる。これらの方針は、蘇州市政治協商會議にて文史資料に関する業務に従事してきた夏冰氏の言葉を借りると、「民間に散在する文献史料とオーラルヒストリーの記録に重点を置くことであるという。

中国人民政治協商會議という公的機関によって収集されているため、編集・公表された文史資料には一定程度の政治的バイアスがかかっていることが推測されるし、そもそも人間の認識や記憶は不確かなものであるから、そういった意味で

二重に「問題」のある歴史資料といえる。しかしながら政治協商会議が民国時代の非共産党エリートたちの流れを汲んでいることから、文史資料にはそういった観点からの貴重な証言や史料が掲載されることも少なくない。この点は九〇年代ごろまで、多くの文史資料が「内部刊行物」であり、自由な流通が制限されていたという事実もそれを傍証しているといえる。

また前述のように、各県レベルで文史資料の編集・発行が続けられており、このような県レベルの文史資料では、オールヒストリーと文献史料を組み合わせた論文ともいえるべき力作も少なくなく、(資料にバイアスがあるとはいえず)新編地方志と並び、地域史や社会史研究において基礎的かつ必要不可欠な歴史資料となっている。

そのため、かつて日本の中国近現代史研究者の多くが文史資料の収集に精力を注いでいた。日本国内でも東洋文庫や村山談話により時限付きで設立された日中歴史研究センター(同センターは現在閉館、収集資料は国際日本文化研究センターが「日中文庫」として継承)などが文史資料の大規模なコレクションを誇っている。

二一世紀に入った後、中国近現代史の領域では檔案(アーカイブ)の公開に伴い、檔案を一次史料に用いた研究が激増

した。しかし、当然のことながら、檔案が公開されていない領域もあれば、そもそも檔案に記録されていない領域——例えば、庶民の日常生活などがその典型である——では、文史資料は依然として重要な情報源・史料の一つなのである。

二 データベースの使い方

続いてデータベースの使い方について解説しよう。図1を見ていただきたい。これはデータベース起動直後の画面である。データの検索方法は、上部中央の箇所にあるキーワード入力欄にキーワードを入力するか、画面左の地域の欄(図書分類と書いてある欄)を展開させて見ていくか、のどちらかになる。後者の検索方法では県レベルで発行された文史資料を県単位で抽出し、書籍タイトルを一覧で見ることができ、大量に見る必要があるのでお勧めできない。また地域を指定し、そのなかでキーワード検索をかけることはできない。

したがってデータの検索方法は、上部中央の箇所にあるキーワード入力欄に、キーワードを入力していく方式になる。キーワード入力欄の上のタブ、左から順に書籍タイトルの検索、章タイトルの検索、全文検索となっている。書籍タイトルは図書館OPACと同じ物と考えてよく、章タイトルの検索は、各文史資料に収録された文章の章タイトルを検索対象とする

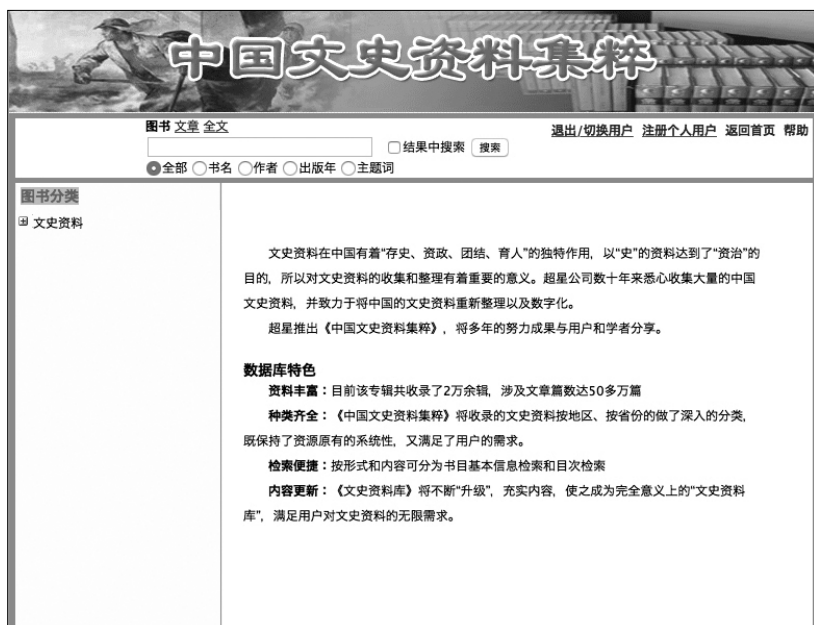


図1 データベースログイン直後の状態

ものである。これらに対して、全文検索は文史資料の全文が検索対象となる。非常に便利であるが、一般的なキーワードでは、検索結果の上限五〇〇件にすぐ引つかかってしまい、実用的ではない。そこで力を発揮するのが、絞り込み検索である。図2と図3（一六頁）を見ていただきたい。このように全文検索と絞り込み検索を活用することで、このデータベースの真価を発揮させることができる。

三 データベースの特徴と問題点

収録された二万冊以上にのぼる文史資料のなかにある必要な記述を一瞬にして検索・出力（印刷は一度に六頁まで。但し表示されるファイルは画像ファイルなので個別には保存可能）できるのは、凄いの一言に尽きる。前述したように、政治的な規制やバイアスはかかっているはずであるが、「三年困難」、「武闘」、「四清」などのキーワードでも検索にヒットする。また原資料画像目次にある頁数と、データベース上での頁数が一致しているのは、書籍単位で見えていくときや、目録や目次から目的の記事を探す際に非常に便利である。

とはいえデータベースの大きさから、一般的なキーワードで検索しても、役に立つ記述を探し出すのは難しく、前述のように絞り込み検索の活用や、ユニーク・オリジナリティのある

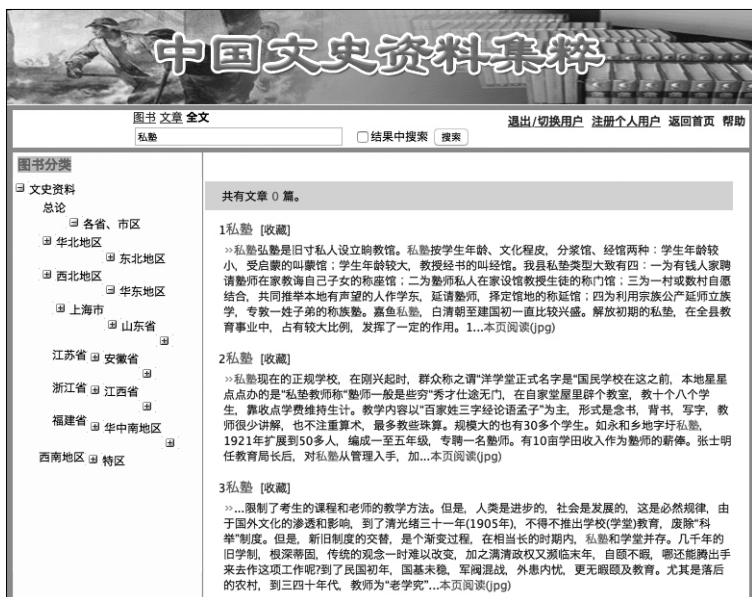


図2 キーワード「私塾」で全文検索を行った結果

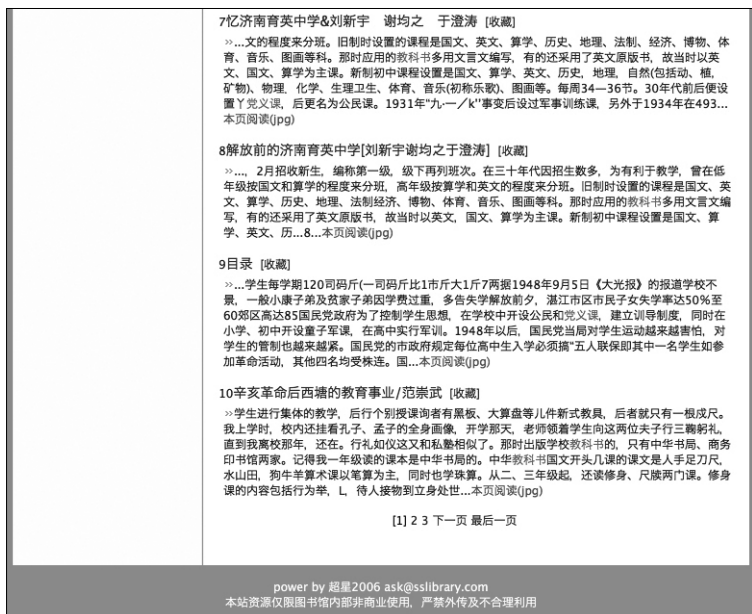


図3 キーワード「党義課」で全文検索を行うと検索結果として180件表示される。さらにそこから「結果中検索」(絞り込み検索)でキーワード「教科書」を入力すると、検索結果は27件まで減る。

キーワードを思いつく発想の斬新さが必要とされる。

なお、本体験版利用の際には、所属機関のIPアドレスを先方に通知する必要がある。IPアドレスによって、アクセスをコントロールしているためであろうが、自宅など機関外からアクセスできないという不便さを伴う。日本でのCNKIサービスのように、プリペイド・カードとパスワードを組み合わせる方式でログイン・検索・出力できるようになると、より一層便利である。

また「文章」（章・文章タイトル）検索で同じキーワードで検索をかけても、検索結果の出てくる順番が毎回異なってしまう。超星側の説明によれば、データベースの更新が頻繁なため、このような仕様になっているという。

四 おわりに

「文史資料」の所蔵は、日本では最大級の文史資料コレクションである国際日本文化研究センター図書館・日中文庫でも約一〇〇〇冊、東洋文庫でも約五〇〇タイトルあまりに過ぎない。それに対してこのデータベースでは約二万冊分の資料が入力されており、それが様々な問題——政治的なバイアス、オーラルヒストリーに共通する問題など——があるとはいえ、全文検索ができることは大きな利点である。そのため

文史資料の史料価値が再評価され、今後、文史資料を傍証で用いた政治史・経済史研究や、文史資料を使った社会史的研究が増えていくであろう。さらに、収録されているデータも頻繁に増加・更新されているという。おそらく中国の多くの重点大学や欧米の研究型大学では、数年のうちに導入され、海外の研究者のあいだでは、「中国文史資料集粹」データベースの利用は「常識」になるであろう。

様々なメディアで日本の中国研究者が嘆いているように、これでは日本と外国との研究インフラの格差は開く一方である。日本でも、せめてどこか一機関、公共図書館等で導入して欲しいものである。あるいは東方書店と数力所の大学・研究機関等でコンソーシアムを組み、共同利用を行うことはできないだろうか。

（本稿の執筆にあたり、上田貴子「文史資料についての覚書」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』第二二号、合庭惇・尾形洋一・劉建輝「東アジア近代史資料の再構築に向けて」『論壇人間文化』第二号、夏冰「蘇州新史料の発掘と運用」、高田幸男・大澤肇編『新史料からみる中国現代史』を参考にした。）

（おおさわ・はじめ 中部大学）